

第 508 回友の会講演会 質問と回答

第 508 回友の会講演会（1/9 開催）はオンライン配信限定で開催いたしました。

参加者のみなさまからの質問と講師からの回答を、以下のとおり公開いたします。

（2021/02/08）

■ 質問者 A 様

- ・ 国立アイヌ民族博物館に行かねば見るこのできない（吹田の民族博物館には無い）アイヌの生活・文化に関する「ビデオ」画像はありますか。
- ・ 人材育成に文化伝承者向け研修とありますが、アイヌ文化（：鮭の皮を使った衣服、：樹皮を使った衣服、：食材作り）等伝承者育成はされていますか。
- ・ アイヌの歴史には文字が無く口伝が主体と伺っていますが、アイヌ歴史は口伝でどの程度把握・記録がされているのでしょうか。
- ・ 世界の先住民族研究センターとの比較では貴博物館はどのレベルとお考えですか。参考にされている先住民族研究センターは何処でしょうか。

梅棹忠夫氏講演録にも北海道で日本の近代化の陰に自然と共生していた先住民族を犠牲にしたことが触られています。アイヌ語由来の地名も北海道を中心に多数存在している身近な存在であると思います。白老町「国立アイヌ民族博物館」はこの状況が落ち着けば行きたいと考えています。

<講師回答>

ご質問ありがとうございます。

まず、アイヌの生活・文化に関する「ビデオ」画像についてですが、当館ではシアターと基本展示室で動画によるアイヌ文化の紹介を行っています。シアターは 96 席ある比較的大型のホールで、大きなスクリーンで、『アイヌの歴史と文化』、『世界が注目したアイヌの技』というそれぞれ 20 分程度の番組を交互に放映しています。前者はアイヌ文化初心者向けの基礎的な知識を提供する番組、後者は海外の博物館に収蔵されているアイヌ資料を紹介する番組です。後者は全映協（一般社団法人全国地域映像団体協議会）のグランプリ 2020 の優秀賞などいくつかの賞を受賞しました。

また、基本展示室には展示資料の解説を補足するために、映像を用いています。例えば「世界」のコーナーでは、『カムイとくらす世界』という 7 分程度の映像（アニメーション）を流しながら、アイヌの世界観の基礎をなす「カムイ」という存在について、わかりやすく解説しています。そのほか、「ことば」のコーナーでは口頭伝承の実演を見ることができますし、「くらし」のコーナーでは樹皮衣（アットウシ）の制作過程や様々な料理、「歴史」のコーナーではシャクシャインの戦いやクナシリ・メナシの戦い、あるいは近代化で時代が大きく変わる中で懸命に生きたアイヌの人々の実像を紹介する番組（それぞれ 3 分程度）などを放映しています。ただし、基本展示室の映像の多くがタッチパネルで番組を選択する方式でして、現在新型コロナウイルス感染予防のために、これらのタッチパネルが使えなくなっているのが残念です。『カムイとくらす世界』など自動で繰り返し再生される映像は上映しています。

次に、「文化伝承者向け研修」についてですが、これはウポポイ全体で取り組むべき課題でして、現在運営主体の（公財）アイヌ民族文化財団がウポポイでの人材育成について検討しています。博物館としましては、その一環としまして、博物館が収蔵する資料（実物資料、映像音響資料、文献資料など）を活用した人材育成を検討し、今年度は一部実施しています。また、ウポポイでは職員研修もかねて、食材集め、樹皮採集、サケの加工、丸木舟の操船などの実習も始めています。

アイヌの伝承は「口伝」が基礎にあります。ただし、口伝で伝えられたものを文字に残そうとする動きはすでに江戸時代後半から見られまして、アイヌ語＝日本語の辞書なども作られました（『蝦夷方言藻汐草』など）。明治以降になるとそのような動きは加速され、アイヌ自らがローマ字やカタカナを使って祖先が伝えてきた口頭伝承を文字化して出版するような活動も始まります。その初期の出版物の一つが知里幸恵の『アイヌ神謡集』（1923年刊）です。そのほかにも自らが伝えた伝承をノートに残した人は1人や2人ではありません。現在でもそのようなノート類や遺稿類の整理、活字起こし、出版が続けられています。また、20世紀になると録音録画技術の向上とともに、音声と映像を記録したテープ類、ディスク類が大量に残されました。現在大学や博物館、北海道立の研究センターなどを中心にそれらのデジタル化と文字起こしの作業も行われています。白老でも、旧（一財）アイヌ民族博物館が白老地方だけでなく、北海道中で集められた音声データのデジタル化とアーカイブ化の作業を進めてきました。その作業は当館が引き継いでいます。

最後に、研究のレベルといいましても、当館は昨年7月に開館したばかりです。研究員も若い人が多く、研究機関としては独り立ちどころか、やっと「お座り」ができたかなという程度です。今後研究体制を充実させ、プロジェクトを実施し、紀要や研究報告の類いを出版していく予定です。当面の目標は北海道博物館や北海道大学アイヌ・先住民研究センターなどと協力して研究体制を整えていくことでして、ゆくゆくは民博のような世界的な先住民族研究のセンターにしていきたいと考えています。

私どもの博物館はアイヌの歴史や文化の様々な側面を事実即して実証的に展示していく博物館です。新型コロナウイルス感染拡大状況が収束しましたら、是非当館とウポポイにお越しいただき、展示をご覧になっていただけたらと思います。今後とも御協力よろしくお願いいたします。

■ 質問者 B 様

国立アイヌ民族博物館の研究対象の範囲についてお尋ねいたしたく存じます。一つは民族の範囲、もう一つは研究対象地域の範囲です。

まず研究対象は「アイヌ民族」とのこと。北海道には、「アイヌ」民族ばかりでなく、「ギリヤーク」とか「オロッコ」とかいう名称の民族も少ないながら居たかと思えます。研究の過程では当然それら民族にも関わらざるを得ないことが出てくると思えます。ギリヤーク、

オロッコなども研究対象範囲にふくまれるのでしょうか。

また、アイヌ民族は北海道以外にも樺太、いわゆる千島、東部シベリア地域に、さらに、特にギリヤーク、オロッコなどは北海道よりもむしろ樺太、シベリア東部に分布している（していた）と思います。アイヌ民族を研究するだけでも、研究対象地域は北海道だけではすまなくなると思いますが、北海道以外の地域についてのアイヌ民族、またアイヌ以外の民族も研究範囲にふくむのでしょうか。（つまり、例えば、シベリアのアイヌ民族、シベリアのオロッコも研究対象に含まれるのでしょうか？）。

国立アイヌ民族博物館は「アイヌ」と明確に謳っておられます。すると「アイヌ民族以外の民族に関わる、あるいは関わりそうなことを、研究対象（展示）に含んではいけない、（アイヌ民族以外の民族を研究対象にするのは、犯罪行為である）」という解釈が成立しえます。日本（人）の常として、そういうことが起こりそうな気がします。

同様に、研究地域を現在の日本領土を超えた範囲に設定すると問題が生じそうな気もいたします。民族の分布範囲と現在の領土範囲に関係はありません。学問的には現在の領土をこえて民族の全体を対象とすべきと考えますが、法律による規定に“北海道の先住民族である..”などとあると、研究対象地域を、樺太や、いわゆる千島列島までにすると問題が生じるのではないのでしょうか。

国立の研究機関ということも考慮し、そのようなことを危惧いたしました。

このような「研究活動に対して生じうる異議」に対して、博物館さんは、どのようなご意見（同意もしくは反論：反論の場合は法的な根拠・効力を持つ反論）をご準備なさっておられるのでしょうか？

<講師回答>

ご質問ありがとうございます。

まず、「北海道以外の地域についてのアイヌ民族、またアイヌ以外の民族も研究範囲にふくむのでしょうか。」とのご質問についてですが、当館はアイヌ民族の文化を中心にすえて展示、調査研究、資料の収集・保存・整理、教育普及、人材育成等の活動を行っておりますが、実はその対象とするのはアイヌ民族文化だけに限りません。彼らの近隣にいました樺太（サハリン）のウイルタ、ニヴフ（現在は「オロッコ」、「ギリヤーク」という名称は使いません。特に「オロッコ」は差別的な表現であると当人たちから指摘されていて、現在は広く自称の「ウイルタ」で呼ばれています）、さらには大陸側のナーナイ、ウリチ、ウデヘ、エヴェンキ、カムチャツカ半島のイテリメンなどの周辺の「先住民族」も、少なくとも展示と調査研究の対象、あるいは交流の相手とします。また、台湾、北米、中南米、北欧、オーストラリア、ニュージーランド、オセアニアなどの「世界の先住民族」も同様です。アイヌだけを見ていたのでは、その文化も彼らの「先住民族」としての位置づけも理解できないからです。アイヌの人々自身も近隣の先住民族、あるいは世界の先住民族との交流を続けてきました。当博物館の展示の最後に、これまで旧（一財）アイヌ民族博物館が交流を重ねてきた世界の先住民族の展示もしています。決して、「アイヌ民族以外の民族に関わる、あるいは関わりそうなことを、研究対象（展示）に含んではいけない、（アイヌ民族以外の民族を研究対象にするのは、犯罪行為である）」ということではありません。

そのことに関しましては、文化庁が発表しました『国立アイヌ民族博物館展示計画』（平

成 28 年 5 月) で、「特別展示」につきまして、「中長期的な計画を立てて企画し、アイヌを含めた世界の先住民族の関係資料を所蔵する国内外の博物館等と連携しながら、その歴史、文化に関する最新の調査・研究の成果等を紹介する。また、アイヌ文化、先住民族文化以外のテーマについても幅広く検討する。」(『国立アイヌ民族博物館展示計画』 pp. 2-3、下線は回答者) とありまして、アイヌ文化以外の文化を展示することも求めています。

また、アイヌ民族が居住していた地域についてですが、同じく『国立アイヌ民族博物館展示計画』の中で展示対象とする地域について、「アイヌの人々が居住してきた北海道、サハリン(樺太)、千島、本州東北地方を中心に、アイヌ文化が周辺諸地域との関わりの中で醸成されてきたことに留意した展示を行う。」(『国立アイヌ民族博物館展示計画』 p. 1) と明記されていまして、当館でのアイヌ文化の展示は、北海道だけでなく、本州東北地方から樺太(サハリン)、千島列島までの範囲をカバーすることが求められています。

法律もアイヌの人々の居住地(過去も現在も含めて)を、現在の国境線の中に限定しているわけではありません。例えば昨年施行された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」(略称「アイヌ施策推進法」)の第 1 条には、「この法律は、日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であるアイヌの人々の誇りの源泉であるアイヌの伝統及びアイヌ文化」(下線は回答者) と記されています。「日本列島北部周辺」という形にぼかしてはいますが、そこには東北地方と北海道以外に千島列島と樺太も含まれておりまして、この法律でもアイヌ民族がこれらの地域に居住していたということは認識されています。

「法律による規定に“北海道の先住民族である..”などとあると、研究対象地域を、樺太や、いわゆる千島列島までにすると問題が生じるのではないのでしょうか。」という危惧も考えられないことはありませんが、上記のように国も、博物館がかつてのアイヌ民族の居住地地域全体を展示の対象に含めること、さらにはアイヌ以外の先住民族の文化を展示することを認めています。

新型コロナウイルス感染拡大状況が収束しましたら、是非当館とウポポイにお越しいただき、展示をご覧になっていただけたらと思います。今後とも御協力よろしくお願いたします。

■ 質問者 C 様

アイヌの自然観は、人間と自然との関係を一元的に捉え、両者は共存・共生するものと位置付けている。また、「北方少数民族」の自然観と共通している点も多いと聞いたことがあります。

ところで、地球環境問題の背景には、人間と自然とを二元的に捉え、自然を利用・管理する対象とする思想があるとも聞いたことがあります。

そこで、アイヌの自然観を二元論をこえた普遍的に意義あるものと評価し、積極的に展示・発信されてはと考えるのがいかがでしょうか。

< 講師回答 >

ご質問ありがとうございます。

アイヌの世界観につきましては、当館ではホームページに掲載しました「よくある質問ーアイヌ歴史・文化の基礎知識」(<https://nam.go.jp/inquiry/>) で以下のように回答しております

Q6. アイヌ民族の世界観とはどのようなものですか？

A. アイヌ民族の世界観を理解する上でラマツ（靈魂）とカムイという重要な 2 つの概念があります。

ラマツ（靈魂）は、それ自体は不滅で、動植物、自然現象、生活道具などさまざまなものに宿っていると考えられてきました。中でも、アイヌ（人間）にとって重要な働きをするもの、強い影響力があるものをカムイと呼びます。この世では、肉体や物全てにラマツがあり、肉体が滅んだり物が壊れたりすると、ラマツはもといた世界に帰ると考えられてきました。

カムイは、カムイの世界にいるときに人間と同じ姿で暮らし、人間と同じような感情を持っていると考えられてきました。時にカムイは、人間の世界を訪れることがあり、人前に現れるとき動植物や自然現象などさまざまな姿となるとされます。

参考文献

・今石みぎわ、北原次郎太『花とイナウー世界の中のアイヌ文化』北海道大学アイヌ・先住民研究センター2015年

・北原次郎太『アイヌの祭具 イナウの研究』北海道大学出版会 2014年

一つ補足しますと、アイヌ（人間）はカムイと直接話しをすることができません。話すときにはイクパスイ（捧酒籠）と呼ばれる特殊なスティックを使って、話しかけるカムイのイナウ（木幣）にお酒を振りかけながら祈りを唱えます。するとイクパスイが祈り言葉を聞き、言い足らずなことも補ってそのカムイに伝えてくれます。詳しいことは、当館の基本展示室の「世界」のコーナーで常時上映しています『カムイとくらす世界』という映像番組で説明しています。

このような世界観は人間と自然とを峻別する二元論ではないことは確かなようですね。また人間が自然を自在にコントロールするという発想もなさそうです。人でも自然界の生き物や事物でもラマツ（魂）が根幹にあり、それがいくつかある世界（アイヌの世界、カムイの世界、死者の世界など）を循環するというアイヌの世界観はユニークです。それは、ものを大事にする、自然を大事にするという発想にもつながっていきます。当館でもこのアイヌのユニークな世界観をよりわかりやすく発信していきたいと考えております。

新型コロナウイルス感染拡大状況が収束しましたら、是非当館とウポポイにお越しいただき、アイヌの世界観、アイヌの心に直に触れていただけたらと思います。今後とも御協力よろしくお願いいたします。